

# 『金槐和歌集』定家本系統本文考

## —四系統分類と定家本系統の系列分類—

犬井 善壽

一

源実朝の家集『金槐和歌集』（以下『金槐集』と略す）の数多い伝本の本文について、早くから多くの先覚が検討され、昭和初期からは、藤原定家所伝本・群書類従所収本・貞享四年版行本の本文をそれぞれの代表とする三種に分類されている<sup>1)</sup>。近年は、その内の群書類従所収本を定家所伝本の系統に含めて、二系統に分類する考え方が有力である<sup>2)</sup>。

本稿において、管見に入った『金槐集』諸伝本の本文を比較検討し、諸本を定家所伝本の系統と貞享版行本の系統との二系統に大別し、抜粋本である『金槐和歌集秀逸』『鎌倉右府家集抄出』の二種を別に系統として立てる、という私案を提出する。併せて、定家所伝本の系統の諸本の本文を比較し、系統分類の低位分類としての系列分類を試み、各系列の本文の性格を明らかにする。系統としては独立させない群書類従所収本の本文の定家本の系統における位置を確認することにもなる。

管見に入った『金槐集』伝本は以下のとおりである。本稿における略号を掲げ、後の検討に関わることになる所載歌数を提示しておく。

略号	所蔵者等	歌数
定家	松岡忠良氏蔵 定家所伝本（岩波書店刊複製）	六六三
函	市立函館図書館蔵本	六六三
松	島原図書館蔵 松平文庫本	六六二

内閣文庫蔵（二〇一・四五五）本	六六二
彰 彰考館文庫蔵（巳二四）本	六六〇
類従 架蔵 群書類従版本 卷二三二所収	六五三
犬 架蔵 群書類従系写本	六四八
貞享 架蔵・鶴舞中央図書館蔵等 貞享四年版行本	七一九
秋 秋田県立図書館蔵本	七一九
達 宮城県図書館蔵 伊達文庫（二四八・一二）本	七一九
春 相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵 春曙文庫本	七一五
桃 東海大学附属図書館蔵 桃園文庫本	七一八
菅 茨城大学附属図書館蔵 菅文庫本	七一八
岩 西尾市岩瀬文庫蔵本	七一八
東 東京大学総合図書館蔵 文久三年本	七一四
平 無錫会図書館蔵 平沼文庫本	七一四
静 静嘉堂文庫蔵本	七一五
小 彰考館文庫蔵 小山田与清写本	七一五
狩 東北大学附属図書館蔵 狩野文庫本	七二〇
南 東京大学総合図書館蔵 南葵文庫本	七一九
上 上田図書館蔵 藤蔵文庫本	七一九
筑 筑波大学附属図書館蔵本	七二〇
初 国文学研究資料館蔵 初雁文庫本 天保四年写本	七〇五
雁 国文学研究資料館蔵 初雁文庫本 天保十四年写本	七一九
玉 鹿児島大学附属図書館蔵 玉里文庫本	七二〇
森 大阪市立大学附属図書館蔵 森文庫本	七二〇
伊 宮城県図書館蔵 伊達文庫（二四八・一三）本	七二七
神 神宮文庫蔵本	七二二

考	彰考館文庫蔵	(巳六・〇六九・五七)本	七二七
高	高松宮旧蔵本		七一六
青	篠山鳳鳴高校蔵	青山文庫本	七一七
書	宮内庁書陵部蔵	(五〇一・七二〇)本	七二六
閣	内閣文庫蔵	(二〇一・四五五)本	七二七
秀岩	西尾市岩瀬文庫蔵	『金槐和歌集秀逸』	一九八
秀桃	東海大学附属図書館蔵	桃園文庫本『叶芳亭叢書』所収	一九七
	『金槐和歌集秀逸』		
抄出	学習院大学図書館蔵	『千載館 抄書』所収	三五
	『鎌倉右府家集抄出』		

『金槐集』の伝本は数多く、以上の他にも、その所在を知らずながら未だ調査のできていない伝本が幾本があるが、諸伝本の本文について概ね整理ができたので、ここに報告を試みる次第である。なお、斎藤茂吉氏著『源実朝』に部分の写真が掲げられている斎藤茂吉氏蔵本および「田中氏蔵本」の二本の本文についても、最後に、言及する所存である。

所載歌数について、一二、付言しておく。類従本と犬本には、巻末に、「一本及印本所載歌」として六六・六五首の歌の追補があり、それを合わせると、総歌数はそれぞれ七一九首・七二三首になる。また、狩・筑・玉・森の諸本には七二〇首の歌が載るが、それぞれに重複歌が一首あり、異なり歌の数は、四本とも、七一九首である。

## 二

『金槐集』に限ったことではないが、歌の集の伝本分類を試みるには、分類基準を明確にし、幾つかの尺度事実を併せ用いる必要がある。

その分類基準として、稿者は、「著作性本文形成」と「書写性本文変

化」の二つを考えている。大幅な改作と小規模の本文改変とが順にあるいは並行して繰り返して行なわれた『平家物語』等の軍記物の本文流伝について考えた原理ではあるが、歌の集の流伝についても、基本的にはこの原理を以て対してよいと考える。著作性本文形成とは、歌の集の場合、撰者による原編と改編者が著作の認識を以てした改編との二様であり、その操作は、所載歌の決定・部類の確立・歌の配置・詞書および歌本文の確定の四つである。従って、伝本間における所載歌・部類・配列・詞書および歌本文の四点にわたる大幅な相違を尺度事実として、著作性本文形成の行われた度数を計り、以て系統分類を行なうのである。

伝本の間で先の四点の全てにわたってかなり相違がある場合、それを原撰者や改編者が著作の認識を以てした歌集撰集や改編という著作性本文形成による相違と見て、両者を「異種本」つまり別系統とする。一方、全体としては大幅な相違はなく、先の四点について小さな差異が数多く見られる、というふうな場合は、その差異は書写者が転写という認識裡に試みた本文改変と無意識裡の本文変化という書写性本文変化による差異と見、両者を同一系統における「異本」とする。例えば、部類と歌の基本的配列は同一で詞書や歌本文に異文は少ないが、所載歌が少々異なる、というふうな場合、書写という作業における一方からの省略・誤脱あるいは一方への補入と見て、同一系統とする。詞書と歌本文に異文は散見するが、所載歌に大幅な相違はなく部類も歌順も同一、というふうな場合も、書写者に改編という認識はなく書写時に部分的に本文の改変を試みたもの、あるいは本文に誤写が生じたもの、つまり書写性本文変化が生じたものと見て、両者を同一系統と扱う、といった具合である。但し、伝本間に全体としての大きな相違はないが、歌数・部類・歌順・詞書および歌本文に少々相違が見られるというふうな場合、つまり本

文に書写性本文変化による相違がある場合は、共通異文を尺度事実として、その系統内部の下位分類としての「系列」に細分する。

もちろん、以上は、集全体の本文の差異に関する言いであり、一首の歌における本文の相違の扱いとは全く別の問題である。一首の歌においては、一文字の改変がその歌の改作という著作性本文形成になることがある。一語の相違で、一首の設定が、一首の歌の歌意が、一首の主題が、全く異なることにもなる、ということとは承知している。

このように、稿者は、著作性本文形成によって系統分類を行ない、書写性本文変化によってその系統を細分する系列分類を行なう、という二段構えで伝本を分類する。更に細かい分類も理論的には考え得るが、煩雑に過ぎ、また、部分を見る際には有効であるにしても、歌集全巻について見るには、例外事項が多くなるため、有効性が少なく、伝本の分類は、この程度に止めるのが妥当であると考ええる。『金槐集』諸本について、本稿において、以上の二段構えの伝本分類を試みる。

系統分類のために、前掲の尺度事実四点について検討する。

まず、所載歌の差異によって、『金槐集』諸伝本は、

六六三首乃至六六〇首を載せる本 定家所伝本以下、松本まで

六五三首乃至六四八首を乗せる本 類従版本以下、犬本まで

七一九首前後を載せる本 貞享版本以下、闇本まで

一九七・八首を載せる本 『金槐和歌集秀逸』

三五首を載せる本 『鎌倉右府家集抄出』

の五群に大別できる。定家所伝本と類従版本との差異は小さい。

次に、部類を見ると、『金槐集』諸本には三種の部類の型がある。

春・夏・秋・冬・賀・恋・旅・雑 定家所伝本以下、犬本まで

(なお、類従本・犬本は「一本及印本所載歌」を付載)

春・夏・秋・冬・恋・雑 貞享版本以下、『秀逸』まで

部類なし 『鎌倉右府家集抄出』

(但し、歌は、春・夏・秋・冬・恋・雑の順に載る)

『抄出』は、部立は特別に示していないが、貞享版本等と重なる。

歌順の相違は、全巻全歌について例示することは、紙幅の都合で、不可能であり、また部分を提示するのみで十分であるため、巻頭の数首を例として示すにとどめる。なお、詞書は、ここでは引用を省略する。

定家所伝本の巻頭は(濁点は稿者。以下同)、

一 けさみれば山もかすみてひさかたのあまのはらよりはるはきにけり

二 こゝのへのくもゐにはるぞたちぬらし大内山にかすみたなびく

三 あさがすみたるをみればみづのえのよしの宮に春はきにけり

四 かきくらし猶ふる雪のさむければはるともしらぬたにのうぐひす

五 春たゝばわかなつまむとしめをきしのべとも見えすゆきのふれゝば

であり、前掲伝本一覧の犬本までの諸本がこれと同一である。貞享版本等についてこれらの歌番号を見ると、順に一・二・七・五・六番である。両者は、巻末に至るまで、歌順が大幅に相違するのである。

貞享版本本の巻頭部分の歌は、以下のとおりである。

一 今朝みれば山も霞て久方のあまの原より春は来にけり

二 九重の雲井に春ぞ立ぬらし大内山に霞たなびく

三 山里に家はすべし鶯のなく初こゑのきかまほしさに  
 四 うちなびき春さりくればひさきおふるかた山かけに鶯ぞなく  
 五 かきくらし猶ふる雪の寒ければ春ともしらぬたにの鶯  
 前掲伝本一覽の貞享本から閣本までがこれと同順である。定家本等と貞享本等とで一・二番は同じ歌順であるが、貞享本等の三・四・五番は、定家本等ではそれぞれ七・六・四番であり、それ以降も全く異なる。このように、定家本等と貞享本等とは歌順が大幅に異なるのである。

『金槐和歌集秀逸』の巻頭五首は、

- 一 今朝見れば山も霞て久かたの天の原より春は来にけり
- 二 山里に家居はすべし鶯の鳴初聲の聞まほしさに
- 三 春はまつ若菜つまむとしめおきし野べともみえず雪のふれ、  
ば

四 草ふかき霞の谷にはぐゝまる鶯のみや昔こふらむ

五 春くればまつ咲宿の梅花かをなつかしみ鶯ぞ鳴  
 である。これは、貞享版本の歌番号でいうと、順に一・三・六・一四・一五番で、逆順になることはない。以下巻末に至るまで、この『秀逸』所載歌は貞享版本所載歌の順序と逆行することは殆どない。しかるに、この五首を定家所伝本の歌番号でいうと、順に一・七・五・五四〇・一四番となり、全く異なっている。このように、『秀逸』は、貞享版本所載歌の順に歌が載るのである。

また、『千載館 抄書』所収『鎌倉右府家集抄出』の巻頭は、

- 一 今朝見れば山もかすみて久方の天の原より春は来にけり
- 二 木のもとにやどりをすればかたしきの我衣手に花はちりつゝ
- 三 山風の桜ふきまく音なりよしのゝ山のいはもとゞろに
- 四 山ちかく家ゐしをれば郭公なくはつこゑを我のみぞきく

五 さみだれの露もまだひぬ奥山の榎の葉がくれ鳴郭公  
 である。貞享版本の歌番号でいうと、順に一・六一・七六・一四三・一五三番である。所載歌三五首全て、貞享版本所載の歌順と逆順になることはない。『抄出』所載歌の歌順は基本的には貞享版本と同じである。以上、所載歌・部類・歌順の差異によって、『金槐集』諸伝本は、

定家所伝本の類

定家本以下、犬本まで

貞享版本の類

貞享本以下、閣本まで

『金槐和歌集秀逸』

岩瀬文庫本・桃園文庫本

『鎌倉右府家集抄出』

『千載館 抄書』所収

の四種に大別できる。そうして、各々の歌の詞書と歌本文に、この四種の間で、特に最初の二種の間で、差異が散見するのである。

例えば、前引の定家本二番・貞享本二番「九重の」の歌の詞書は、

立春の心をよめる

(定家本以下、犬本まで)

春のはじめの哥

(貞享本以下、閣本まで)

と、定家本等と貞享本等とで本文が大きく異なる。また、定家本九番・貞享本一八番の「春日野の飛火の野守今日とてや昔かたみに若菜摘むらむ」(定家本により、私に校訂)の歌の詞書は、同様に、

わかなつむところ

(定家本以下、犬本まで)

屏風の絵に若なつむ所(貞享本以下、閣本まで)

と、その本文が定家本以下犬本等の諸本と貞享本以下閣本等の諸本とで相違する。このように、両者の間で詞書の本文の差異がきわめて多い。

歌本文も、定家本等と貞享本等とで相違することが多い。

定家 たれにかもむかしもとはむふるさとのきばのむめは春をこそしれ  
 (三〇番。犬本まで。表記は各本で異なる)

貞享 誰にかもむかしをとはん故郷の軒はの梅は春をこそしれ

(三二番。閨本まで。表記は各本で異なる)の傍線を施した「むかしも」と「むかしを」の相違、あるいは、

定家 秋ちかくなるしるしにやたまだれのこすのまとをしかせのす  
ゞしき (三二番。以下、犬本まで。表記は異なる)

貞享 秋ちかくなるしるしにや玉すだれこすのまとをし風の涼しき  
(一七三番。以下、閨本まで。但、静・小・筑・森・高・青・書・閨は末句「風の涼しき」。表記は異なる)

の「たまだれの」「玉すだれ」、「すゞしき」「涼しき」の相違といった具合である。——尤も、「秋ちかく」の歌の末句に見られるように、貞享本等の諸本の中にグループとして定家本等と同じ本文を持つ本がある、といった例も無いではない。それらは貞享本系統における系列分類と関わってくる事柄である。別に粗々の検討を加えて報告した。

要するに、前掲伝本一覽の定家本以下犬本までと貞享本以下閨本までの間に、所載歌・部類・配列・詞書および歌本文の諸点において、対立する相違があるのである。幾つもの尺度事実にわたるこれらの相違は、改編が行なわれた結果であり、両者を別系統とするのが妥当である。

ちなみに、独立した系統と扱われることがあつた群書類従版本は、所載歌が定家所伝本に比して一〇首少ないだけで、他の点では、定家所伝本等と大きな相違はない。強いて言えば、巻末に載る「一本及印本所載歌」の追補が定家所伝本等の本文との大きな相違である。但し、これは文字通り、「一本」つまり某写本および「印本」つまり版行本とに載る歌の追補であつて、この本の本来的な所載歌ではない。この「一本及印本所載歌」は別として、群書類従版本所収本の本文は——そして犬本も——、定家所伝本と同一の本文と見てよいのである。

群書類従本が独立した系統とされたのは、昭和四年に定家所伝本が発

見されるまで、『金槐集』は、貞享四年版本と群書類従版本所収本の二種の本文が対立する系統とされていたことによる。そこに、定家という偉大な校訂者の筆を含む建暦三年という早い書写の本が発見され、類従版本には似るが「一本及印本所載歌」の無いその新出の本文が一つの独立した系統として扱われるようになったのは、ごく自然であつた。

『金槐集』は、藤原定家所伝本等の諸本と貞享四年版行本等の諸本との二系統に分類してよい。その呼称は、先覚諸氏の研究の積み重ねを重視し、前者を「定家本系統」、後者を「貞享本系統」とする。

所載歌の点で先の二系統とは大異のある『金槐和歌集秀逸』および『鎌倉右府家集抄出』は、共に、部類・配列・詞書および歌本文の三点に関しては、二系統の内の貞享本系統とほぼ合致する。実は、両者とも貞享本系統の本文からの抜粋本なのである。

『秀逸』は貞享本系統の賀茂真淵評語書入本からの抜粋である。細部にわたる報告は改めて試みるとして、概ねを紹介しておく。

西尾市岩瀬文庫蔵本は、外題は「金槐和歌集 完」、内題は『金槐和歌集秀逸』である。冒頭に、「鎌倉右大臣の哥をみてしるる詞」と題する賀茂真淵評語本『金槐集』諸本に付された序文が載る。その序文の末尾に「宝暦十年五月、心しりのぬしたちの為に、賀茂真淵がしるせる也。ゆめ大かたの人にはみすまじきもの也」とあるから、真淵評語書入本『金槐集』は宝暦五年三月記のものと宝暦十年五月記のものとの二種が伝わるのであるが、後者を底本として抜粋されたものであることが判る。なお、東海大学附属図書館蔵桃園文庫本『叶芳亭叢書』所収『金槐和歌集秀逸』も、これと同一の書である。『桃園文庫目録』では「賀茂真淵選」とされている。この書そのものが真淵の選であるのかのこく見

えるが、真淵評語書入本『金槐集』からの抜粋本なのである。

この『秀逸』所載歌の本文は、貞享本系統と同文である。例えば、

一二 桜花ちらまくもをしうちひさすみやちの人そとのみせりけり

(桃圖本は末句を「とのみせりける」とする)

は、定家本系統諸本の本文は、第二句が「ちらまくをしみ」、第五句が「まとみせりける」(内本のみ「まとひせりけり」)であり、『秀逸』とは異なる。貞享本系統の殆どの伝本は、第二句は「ちらまくおし」とであるが第五句は「とのみせりけり」あるいは「とのみせりける」であり、『秀逸』はこちらとほぼ同文なのである。いま一例示しておく。

五四 久かたのそら飛雁の泪かもおほあさきのさの上の露

は、定家本系統諸本は、第二句を「あまとぶかりの」、末句を「さがうへのつゆ」(第二句を類従版本は「そらい」と校合、犬は「そら飛雁の」。類従版本・犬本は末句を「さの上の露」とし、貞享本系統諸本は、狩本以外は第二句を「空とお鷹の」、全ての伝本が末句を「さの上の露」とする。『秀逸』は貞享本系統本文と同文なのである。かような例が他にも多い。特に、その貞享本系統の中、真淵評語書入本諸本の本文に近い。その関係については、別に報告を試みることにする。

『抄出』も、貞享本系統『金槐集』と同じ本文を備えている。

四 山ちかく家あしをれば郵公なくはつこゑを我のみぞきく

の第二句を、定家本系統では、定家・函・松・類従は「いゑあしせれば」(内・彰・犬は「家あしをれば」)、第四句を「なくはつこゑは」とするが、貞享本系統では、伊・神・考・高以外の本は第二句を「家あしをれば」、狩以外の本は第四句を「なく初こゑを」とする。『抄出』は貞享本系統と同文なのである。かような例が他にも多い。

但し、『抄出』には、この本独自の異文が散見する。例えば、

三 山風の桜ふきまく音なりよしの山のはもとゞるに

の第四句を貞享本系統諸本も定家本系統諸本も全て「よしの、滝の」とする、といった具合である。かような例がごく少数ながら見られるが、『抄出』の本文は、基本的に貞享本系統の本文であると言える。

要するに、『金槐和歌集秀逸』も『鎌倉右府家集抄出』も貞享本系統本文から歌を抜き出すという著作性本文形成が行なわれたものなのである。そのことを認識した上で、この二種を特別に系統と扱う。

以上の検討により、稿者は、『金槐集』の諸伝本を、

藤原定家所伝本系統 (定家本系統と略す)

貞享四年版本本系統 (貞享本系統と略す)

金槐和歌集秀逸系統 (秀逸本系統と略す)

鎌倉右府家集抄出系統 (抄出本系統と略す)

の四系統に系統分類する。なお、秀逸本系統と抄出本系統とは、貞享本系統本文からの抜粋本という、特別の系統である。

### 三

前節において定家本系統『金槐集』と位置付けた諸伝本の間で、所載歌と詞書および歌本文に小さな相違がかなり見られる。本節において、定家本系統諸本の本文を比較し、下位分類として、系列分類を試みる。

最初に、所載歌の相違を見てみる。

定家本と函館本の所載歌は、全く同じ歌で、六六三首である。

定家所伝本は定家の筆を含む建暦三年の写であり、函館図書館本は江戸期の写であるが、実は、この両本は、和歌二行書きと一行書きという

差異などはあるものの、同一歌数で、歌順の相違もなく、片野達郎氏が言われるとおり、表記の点で、仮名の字母に至るまで、殆ど同じ本文なのである。両者は同一系列と認定してよい。

松本・内本・彰本の三本では、定家本・函本でいうと三〇一番にあたる歌（以下、『私家集大成』所収定家本によって示す）、

三〇一 かたしきのそでこほりぬふゆのよのあめふりすさむあか月のそら

が共通して欠けている。この歌が欠けるのは、この三本のいずれか、あるいはこの三本の共通祖本の段階において、その直前に載る、

三〇〇 かたしきのそでこそしむむすびけれまつよふけぬるうちのはしひめ

の歌の初句・第二句の「かたしきのそで」とによる目移りが原因で誤脱を生じたものと見てよからう。

なお、彰本は、更に、定家本でいうと一九六番と六三一番の二首、一九六 秋かぜはあやなふきそしらつゆのあだなるのべのくずのは

のうへに  
六三一 われゆへにぬるゝにはあらじから衣やまちのこけのつゆにぞ

を欠く。一九六番は一九二番から一九八番に至る「秋歌」という詞書のもとの歌の一首で、歌のみが欠けたわけであるが、六三一番は、

とをきくにへまかれりし人のもとより、見せばやそでのなど申をこそたりしかへりごとに

という長い詞書をも欠いている。その欠脱の原因は明らかではないが、あるいは、直前の歌（彰本では六二八番に当る）の詞書の、

ちかうめしつかう女ばう、とをきくにゝまからんと、いとま申しし

かば

の「とをきくに」が行頭にあったことによる目移りかもしれない。

以上の歌の欠脱によって、松・内二本の所載歌は六六二首、彰本の所載歌は六六〇首という数になる。以上三本の近似性はこれで明らかである。それに、彰本が後出本文であることもほぼ間違いないのである。

類従版本が定家本に比べて一〇首の歌を欠くこと、その一〇首が全て巻末の「一本及印本所載歌」の中に追補されていることは、諸先覚が指摘しておられ、その歌の引用例示もあるため、ここでは、歌の引用は省略に従い、類従版本所収本が欠く歌を定家本の歌番号によって掲げ、付載された「一本及印本所載歌」におけるその歌の歌番号を（ ）内に示すにとどめておく。

一六（六五五）・六六（六五七）・九四（六五九）・一〇一（六六二）・一〇二（六六一）・二〇九（六七二）・二七一（六七四）・二七九（六七六）・二八六（六七五）・五七二（七〇九）

これで、類従版本の所載歌は六五三首となる。大本は更に、

一一八 なつごろもたつたの山のほとゝぎすいつしかなかむこゑをきかばや

四四八 春ふかみゝねのあらしにちる花のさだめなきよにこひつゝぞふる

四八〇 をしかふすなつのゝくさのつゆよりもしらじなしげき思ありとは

五〇〇 しらまゆみいそへの山のまつのはの時はにものを思ころかな六〇四 世中はつねにもがもなゝきこくあまのをふねのつなでかなしも

（以上、定家所伝本による）  
の五首が欠けており、所載歌数は六四八首である。大本は、類従版本の

ごとき本文を書写する間に更に歌を欠くことになったのである。

以上、定家本系統諸伝本の所載歌の面でいうと、定家本と函本とが同一、松・内・彰三本が近似し、そのうちの彰本は後出本、類従本・犬本の二本が近似し、犬本は其中では後出本、ということになる。

歌の順が、いま示したグループによって異なることがある。

松・内・彰の三本では（松本によって示す）、

一七〇 いまはしもわかれもすらし七夕はあまの河原にたづぞ鳴なり

一七一 織女の別をおしみあまの川やすの渡にたづもなかなん

とあるが、他本ではこれが逆順であり（定家本一七一・一七〇）、

二〇九 あまの原ふりさけみれば月清み秋のよいたく更にける哉

二一〇 秋のよの月の都のきりぎりす鳴は昔のかけや恋しき

も、他本では逆順である（定家本二一〇・二〇九）。

また、この三本のうちの内・彰二本では（内本によって示す）、

四一二 我がひは夏野のすゝき茂けれとほにしあらねばとふ人もなし

四一三 なでしこの花にをきある朝露のたまさかにだに心へたつな

とあるが、松本を含む他の伝本では逆順（定家本四一四・四一三）にな

っている。松・内・彰の三本がこの定家本系統の中でも特に近似するこ

と、そのうちの内・彰二本が更に近似することなどが、以上の検討によ

って明らかになったのである。

類従版本は、歌順の点では定家本系列と全く同じである。但し、犬本のみが歌順を異にすることがある（犬本によって示す）。

九〇 桜花咲てむなしく散にけりよし野の山はたゞ春の風

九一 心うき風にも有哉桜花さくほどもなく散ぬべらなり

は、類従版本を含め、他本は逆順（定家本九三・九二）であり、

三七九 あしのやの灘のしほ焼われなれやよるはすがらくゆり詫ら

む

三八〇 うきなみのをしまの蟹の濡衣ぬるとないひそ朽はつとも

三八一 伊勢しまやいちしのあまのすて衣あふことなみに朽やはてな

む

三八二 淡路しまかよふ千鳥のしはしくも（ママ）はねかくまなく恋

や渡らん

三八三 夜を寒み鴨の羽がひにおく霜のたとひけぬとも色にいでめや

三八四 あし鴨のさわぐ入江のうき草のうきてや物をおもひわたらん

三八五 かくれぬの下はふあしのみこもりにわれぞ物思ふ行方しらね

ば

は、定家本の歌番号でいうと、順に三九四・三八九・三九〇・三九一・

三八七・三八八・三九五である。犬本は、三八〇番から三八四番に至る

歌の順序が大きく異なっている。類従本のグループの中で、犬本は、歌

順の点においても、大きな本文変化が生じていると言えるのである。

歌順の相違によって、定家本系統の中の松・内・彰三本が似ること、

その三本に比して、類従本は定家本・函本に似ること、犬本に独自の歌

順の部分があること、などが指摘できた。

定家本系統諸本は、以上のように、所載歌の相違と歌順の相違とによ

って、大別三種のグループに分けられるのである。それを、

定家本系列 （定家本・函本）

松平本系列 （松本・内本・彰本）

類従本系列 （類従本・犬本）

と呼ぶことにする。系統として位置付けられることがあった類従本は、



定家本系統の中の一列と位置付ける、ということになる。

この三系列において、同系列諸本の間では同文で、他系列との間で詞書および歌本文に相違が見られることが多い。定家本の、

一二 むめの花いろはそれともわかぬまでかせにみだれてゆきはふりつ、

の第三句「わかぬまで」を、松・内・彰三本は「みえぬまで」（松による）とする。「梅の花」と「雪」との区別がつかないという歌意であり、「分かぬまで」とある定家本・函本・類従本等の本文が妥当である。

七五 みよしのゝやましたかけのさくらばなさきてたてりとかせに  
しらすな

の第二句「やましたかけの」を松・内・彰三本は「山下風の」とする。

「山下風の桜花」に「風に知らすな」では齟齬がある。他本の「山下風の桜花」に向って「風に知らすな」と命令する本文が妥当である。「遣（け）」と「世（せ）」の仮名の類似による誤写と見てよい。

八一 やまざくらあだにちりにし花のえにゆふへのあめのつゆのゝ  
これる

の第五句「つゆのゝこれる」を、松・内・彰三本は「露ぞこぼるゝ」とする。桜の花の枝に夕べの雨の露が残っている、とあつてこそ歌意が通る。桜の花の枝に夕べの雨の露がこぼれる、という松・内・彰三本の本文では、歌意をなさないのである。

一一四 いづかたにゆきかくるらむはるがすみたちいでゝ山のはにも  
見えなで

の第二句を、松・内・彰三本は「ゆきかへるらん」とする。どちらへ行き帰ったのだらうというこの本文でも一応の歌意は通るが、末句の「見

えなで」と呼応するのは、他伝本の「いづ方に行き帰るらん」の本文の方である。「く」を「へ」と誤ったものである。因みに、貞享本系統は、類従本によつて校訂したところのある森本は「ゆきかくるらん」であるが、他は、全て「行かへるらん」（貞享による）とする。この系統間にこの部分で影響関係があるか否かは、今のところ判断できない。

一三二 さみだれに水まさるらしあやめぐさうればかくれてかる人の  
なき

の第四句の「うれば」即ち「未葉」を、松・内・彰三本は「それは」とする。「それは」という指示語では、この場合、歌意をなさない。「う」と「そ」との仮名の類似による誤写である。ちなみに、貞享本系統諸本の内の版本と真淵評語本諸伝本は「かれは」とする。

以上のごとく、定家本系統の中の松平本系列とした松・内・彰三本は定家本その他に比して共通異文が多い。共通の祖本を持つと見てよい。例示したのは誤写誤謬の例であるが、意改と見てよい共通異文も多い。

定家本系列や松平本系列に対して類従本と大本とが共通異文を有することも多い。幾つかを例示してみる。類従版本と大本の（版本による）、

三一 古郷に誰しのおとか梅のはなむかし忘れぬかに匂ふらん

の第二句を、定家本系列も松平本系列も「たれしのべとか」とする（定家本三三番）。貞享本系統諸本も「たれしのべとか」である。鎌田五郎氏が言われるように、類従版本の「誰しのおとか」でも意味は通じるが、この歌の本歌である『古今集』四二番の紀貫之の歌、

人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける

の「花ぞ昔の香に匂ひける」という能動的な「花」の働きを考える時、「誰を偲べ」といつて、咲き匂っているのだろうか」という本文の方が、「誰を偲ぶ」というので、咲き匂っているのだろうか」とあるよりも妥当

である。類従本に至る間の本文変化と見てよい。

二〇八 伊勢の海や浪にかけたる秋の夜の有明の月に松風ぞふくの第二句を、他系列は「波にたけたる」とする。「波の上に更けた有明の月」という歌意でこそ詞書の「海辺月」という歌題に合う。「かけたる」では、「波に掛けたる」にせよ「波に欠けたる」にせよ、「秋の夜の有明の月」とは繋がらない。類従本・犬本の誤である。

三〇一 さ夜更ていなるの宮の杉の上に白くも霜の置にける哉の第三句「杉の上」は、類従本系列以外は「杉の葉に」（定家本三二〇）とする。松平本系列三本は「葉」と表記し（貞享本系統の数本も）、定家本系列は「は」と仮名表記する。犬本は「うへ」と表記する。「杉の上」に「霜の置きにけるかな」でも歌意は成り立つが、微細な「杉の葉に」「霜」が置いたことに目を向けた歌であるわけで、「葉」が「者」の略体の「は」と表記されたものを「上」と読み誤ったのである。因みに、定家本系統では、この歌に続いて、

三一一 冬籠りそれとも見えず三輪の山杉の葉白く雪の降れば

三一二 み熊野の柳の葉しだり降る雪は神の掛けたる四手にぞあるらし  
(定家本により、校訂)

と「葉」を詠んだ歌を配している。三二〇番も「葉」が妥当である。

このように、類従版本と犬本とは、細部において、定家本系列や松平本系列に対立する共通異文を持っている。それらの異文は、定家本系列のごとき本文に意改が試みられたり誤謬が変化を生じたものと見てよい。類従本系列も、定家本系列の末流本文であるということになる。

定家本系統諸本は、その本文の小異によって、定家本系列・松平本系列・類従本系列に細分できる。その三系列の中では、定家本系列の本文が、もっとも妥当なもので、松平本系列や類従本系列には、誤謬等の本

文変化が生じている、ということが明らかにできた。

定家本系統『金槐集』諸伝本の内、管見に入っただけの以上の七本に過ぎない。調査伝本が増えれば、更に細かい細分が可能になるのかも知れない。今後の調査に俟つことにする。

ただ、斎藤茂吉氏「源実朝」の「金槐集の伝本」の章に「定家所伝本よりの写本」として紹介のある「其一（家蔵）」とされる本（「斎藤本」と仮に呼ぶ）と、「其二（田中氏蔵）」とされる本（「田中本」と仮に呼ぶ）が、掲げられた写真によって見るに、確かに定家本系統本文を備えていると認められる。其の両本の本文について、その部分に限って、本稿の三系列細分の結果を尺度に、検討を加えておく。

斎藤本には、定家所伝本でいうと冒頭一番から三番詞書までおよび巻末の六六〇番詞書から六六三番歌までの二面、田中本は、定家所伝本でいうと冒頭一番から四番歌までおよび巻末の六五九番歌から六六三番歌までの二面の写真が掲げられている。その本文を見ると、定家所伝本の、

述懐哥

六六〇 きみがよになをながらへて月きよみ秋のみそらのかけをまたなむ

は、斎藤本は表記の点まで定家所伝本と合致する（函本も）。田中本は、初句の「きみ」が「君」と、第五句の「またなむ」が「またなん」と、表記に小異が見られるのみである。

太上天皇御書下預時哥

六六一 おほきみの勅をかしこみちゝわくに心はわくとも人にいはめやも

六六二 ひんがしのくにゝわがおればあさ日さすはこやの山のかげと

なりにき

の二首は、斎藤本も田中本も、表記の点に至るまで、定家所伝本の本文と全く合致する（函本も）。

六六三 山はさけうみはあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめや  
も

は、斎藤本は定家所伝本と表記の点に至るまで合致し（函本も）、田中本は、第二句の「あせなむ」が「あせなん」と表記が一字異なるだけで他は表記も同じである、といった具合である。

要するに、斎藤茂吉氏蔵本は、定家所伝本と表記の点まで殆ど同一であり、田中氏蔵本は、表記の点で仮名に漢字を少々宛てるなどの改変はなされているが、その本文は定家所伝本と殆ど同文である。つまり、両本共に、函本と同じく、定家本系統の定家本系列の本文を備えている、ということになるのである。定家本系列は、函本の他にも、斎藤茂吉氏蔵本や田中氏蔵本が伝存するのである。

#### 四

定家本系統『金槐集』諸伝本が、その細部における本文の差異によって、三つの系列に細分できること、その三系列の中では、定家本系列、つまり、定家の筆を含む建暦三年の写本およびその転写本の系列が最も信頼できるものであること、などを明らかにした。

もちろん、諸伝本の本文の相違は、系列単位のものばかりではない。各々の伝本に独自異文が多くあり、系列単位ではなく別の組み合わせによる共通異文もかなり見られる。さような、定家本系統の個々の伝本の本文に関しては、改めて報告する所存である。本稿においては、『金槐集』の系統分類と、その下位分類としての系列分類とを試み、諸系列お

よび諸伝本の本文の大まかな位置付けを示してみたのである。

最後に、定家所伝本の本文について、二三付言しておく。

藤原定家の筆を含む定家所伝本は、知られるように、「建暦三年十二月十八日」という奥書を持ち、実朝在世中の写本という貴重な伝本である——建暦三年は十二月六日に「建保」と改元があり、この日付には内部矛盾がある。その件に関して、早くから諸先覚に御見解があり、稿者も別に検討する所存である——。その定家所伝本が、仮名の字母に至るまで、あるいは、表記の点に至るまで、忠実に写され、また、書写本が転写され、函本や斎藤本・田中本のごとき同系列の伝本が残され、また、転写を経て意図が試みられ誤写が生じるといふ書写性本文変化が生じ、松平本系列や類従本系列が派生した、と見てよからう。

尤も、定家所伝本そのものに誤謬が無いでもない。それが、同系列の函本その他において修正されている。さような例を二三指摘し、この定家本系列において、また定家本系統において、修正や改訂という書写性本文変化が生じた事実を示しておく。

一二九 みな人のなをしもよふかほとゝぎすなくなるこゑのさとをと  
よむか

の末句は、管見に入った全ての伝本が「さとをとよむ」とする。この本文について、鎌田氏は、この歌の本歌である『古今集』四二三番の藤原敏行歌「くべきほどときすぎぬれやまちわびてなくなるこゑの人をとよむ」（『新編国歌大観』による）の構想と語法との関連を考えられ、結局、定家本の「とよむか」は誤写であろう。それでは、一首は、構想上、前段と後段とが呼応関係を欠く羅列になってしまおう。

とされる。定家所伝本を字母の点まで忠実に伝えている函本を始めとし

て、全ての伝本が「とよむる」と写しているのは、ごく早い段階で定家所伝本の「とよむか」を誤りと見て、修正が試みられたのであろう。

一五六詞書 海邊秋きたるといふ心を

という定家所伝本の詞書の「海邊」も、他の伝本では全て「海邊」とあり、妥当である。類似の字形による定家所伝本の誤写を、これも函本以下の諸本が修正を試みていると見てよいのである。

二四五 あきたけてよぶかき月のかげ見ればあれたるやどこころもう  
つなる

の末句「うつなる」は、係結びではないから、「うつなり」が妥当である——尤も、連体結びと見てもよいが——。定家本・函本以外、つまり定家本系統の松平本系列・類従本系列も貞享本系統も、「衣うつ也」(松による)とする。定家本系統のある本で修正されたのである。

尤も、定家所伝本の誤謬の全てが、函本以下、あるいは松平本系列以下の本で、修正されたわけではない。例えば、定家所伝本の雑部の、

なでしこ

五五一 ゆかしくはゆきても見ませゆきしまのいはほにおふるなでし

このはな

五五二 わがやどのませのはたてにはふうりのなりもならずもふたり

ねまほし

の五五二番は、詞書と歌の内容とが齟齬する。ここは、詞書が脱しているとしてよいのであるが、定家本系統諸本に修正はない。貞享本系統に至って、恋部に「恋歌の中に」の詞書のもと四一四番として配されることで、修正が完了した(因みに、直前の五五一番は「撫子」の詞書で夏部に一六六番として配された)。かような例が他にも少々見られる。

以上のように、定家所伝本に誤謬があり、それが、殆ど同文である函

館本で修正され、また、松平本系列や類従本系列に至って修正されることがあったわけである。さほどその数は多くないが。

定家本系統『金槐集』は、藤原定家の筆を含む定家所伝本を祖本とする——それに先行する「鎌倉本実朝集」の存在を推定したことがあるが、それについては、現存本の分類をめざす本稿であり、問題としないでおく——。その本文を殆どそのまま写した本が、市立函館図書館蔵本、それに斎藤茂吉氏蔵本と田中氏蔵本である。すなわち、定家本系列諸本である。その本文に意改や修正が試みられ、あるいは誤謬が生じた結果、松平本系列や類従本系列となったのである。

松平本系列や類従本系列は、この系統としては、意改や誤写などを多く含み、後出の本文ではある。しかし、そこには、定家所伝本そのものの、また、定家本系列の、誤写を正すところがある。さような意味で、無視してはならない本文を備えているわけである。

定家本系統『金槐集』諸伝本の三系列分類私案は、稿者の現在までの調査と検討とでは、貞享本系統本文の成立の問題にまでは繋がって来ない。しかし、定家所伝本の本文の妥当性を明らかにした点と、独立した系統とされたことのある群書類従所収本の位置付けを明確にした点で、本稿の検討は無意味なものでもあるまい。

#### [注]

- (1) 川田順氏が『源実朝』(昭和十三年六月)において、「伝本」は貞享四年版本三冊、定家所伝本一冊、群書類従巻三三二所収本の三種がある」とされ、斎藤茂吉氏が『源実朝』(昭和十八年十一月)において、「第一 定家所伝本」「第二 群書類従本系統」「第三 貞享本系統」

- とされる、など。
- (2) 樋口芳麻呂氏が『新潮日本古典集成 金槐和歌集』の「解説」(昭和五十六年6月)において「建暦三年本」と「柳営亜槐本」の二系統とされ、鎌田五郎氏が『金槐和歌集全評釈』(昭和五十八年1月)の「解説」において「定家所伝本」と「柳営亜槐本」(貞享本)の二種がある。「群書類従本」は前者の系統」とされるなど。
- (3) 斎藤茂吉氏『源実朝』(昭和十八年11月)
- (4) 『あなたが読む平家物語 1 平家物語の成立』所収「平家物語」の成立基盤——その書承的側面——(平成五年11月)
- (5) 『私家集大成 中世Ⅰ』所収「実朝Ⅰ 金槐和歌集(定家所伝本複製)」参照。
- (6) 『私家集大成 中世Ⅰ』所収「実朝Ⅱ 金槐和歌集(貞享四年版本)」参照。
- (7) 西尾市岩瀬文庫蔵本による。
- (8) 桃園文庫本では、四番に「朝霞たてるをみればみよし野のよしの宮に春は来にけり」の歌が入るが、岩瀬文庫本はこれを二七番とする。これが両者間の唯一の歌順の相違である。この歌は貞享版本七番歌で、岩瀬文庫の位置は不審である。桃園文庫本の位置にあつてこそ貞享版本の歌順と逆行しないのである。
- (9) 貞享本系統諸本については、調査伝本は本稿より少ないが、『金槐和歌集』貞享本系統本文考(「筑波大学平家部会論集」五・平成七年11月)において、検討を加え、系列分類を試みた。注17の拙論にもこれに関して触れるところがある。
- (10) 佐佐木信綱博士による『定家所伝本 金槐和歌集』の発見とその本文の複製刊行(昭和五年1月)。
- (11) 斎藤茂吉氏が「真淵はこの板本(貞享版本。稿者注)を手に入れ、仮名ちがひや用字の錯誤をただし、短評を加へ、それから佳い歌には印を付け、『鎌倉右大臣家集の始に詞』といふ総論を書いた。それが本となつて、諸字者がこの板本に写取り、或は板本を写してそれに真淵の書入を加へた」(『源実朝』)と説明された本。版本書入本の他、第一節に示した調査伝本一覧の中の、菅本から森本までの諸本がその写本である。
- (12) 『桃園文庫目録 中巻』(東海大学附属図書館・昭和六三年3月)
- (13) 『函館市立図書館蔵金槐集』(新典社刊・影印)の「解説」(昭和四七年)
- (14) 佐佐木信綱博士『定家所伝本 金槐和歌集』の「解説」に指摘があり、斎藤茂吉氏『源実朝』等に引用がある。
- (15) この件については「谷森本『後葉和歌集』所載実朝歌の本文吟味から」(『文芸言語研究 文芸編』二八・平成七年9月)で指摘した。
- (16) 鎌田五郎氏『金槐和歌集全評釈』の当該歌の項。
- (17) 「『夫木和歌抄』所載実朝歌の本文吟味——『金槐和歌集』の本文流伝との関連において——」(『文芸言語研究 文芸編』三〇・平成八年9月)、および「『東撰和歌六帖』所載実朝歌の本文吟味から」(『日本古典文学の諸相』平成九年1月)。

(いぬい よしひさ 筑波大学文芸・言語学系教授)